

効率的時間外学習実践のための試み

音楽教育講座・木村 勢津

I 授業の概要

1. 目的

声楽①で学んだ歌唱基礎技術を向上させると共に、楽曲を正しく解釈できる基礎的能力を養い、目指す歌唱表現について考究できる姿勢を養う。

2. 到達目標

- (1) 作曲家や楽曲について正しく理解し、述べることができる。
- (2) 詩と音楽の関係を理解し、原語で歌唱できる。
- (3) 受講者間で演奏を聴き合い、歌唱について自らの意見を述べるができる。

3. 授業の位置づけ

本授業は、音楽文化コース2年生を対象とした授業で、同コースのカリキュラムマップにおいては、基礎から発展に位置するものである。

1年前期（イタリア古典歌曲の歌唱）で既習したベルカント唱法の歴史的発展について見識を深め、ロマン派および近代イタリア歌曲の芸術的歌唱表現を实践できる基礎力の育成を中核として授業展開を行っている。今後、学年進行と共に学びを深めるドイツリートや日本歌曲の歌唱は、本授業で修得した楽曲へのアプローチ方法を応用することにより、学習の効率化が図れるものとする。

4. 受講生の構成

実質受講者は2年生11名、過年度生1名の12名。内11名は1年前期よりの継続受講者、1名のみがイタリア語のテキストによる歌唱初習者であった。なお、全員が器楽領域（ピアノ）での卒業研究を希望している。

5. 授業形態と授業進行の特徴

授業は、歌唱演習と講義の併用で展開した。歌唱技術を修得するためには、楽曲の特徴や受講生個々の課題を明らかにし、即した学習方法の提示が不可欠となる。シラバス作成時に受講者数が確定できないため、授業ガイド

ンスにおいて、受講生と相談のうえ、受講生を2グループに分け、隔週の個別指導とすることとした。

II. 授業改善のポイントと成果

個別指導（レッスン）型の授業では、受講生の事前の準備が授業の要となる。1枠6名の個別指導と講義においては、自分の課題を把握し、学習のポイントを定めて受講することが授業効率を高めることに繋がると考える。そこで、本授業では、時間外学習を促進するための以下に示す3つの試みを実施した。

1. ディクシオンの個別指導

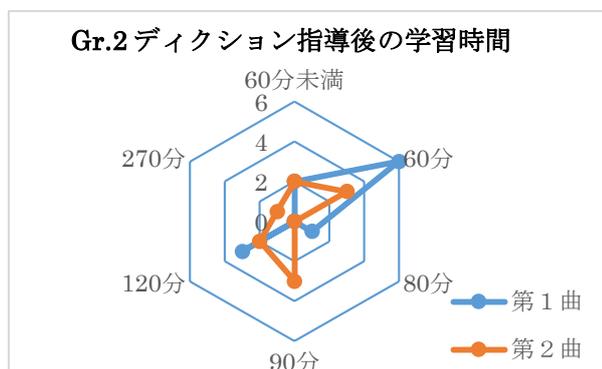
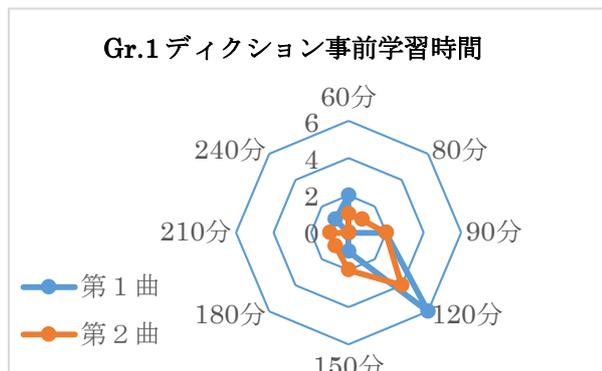
愛媛大学では、イタリア語の講座が開設されていない。クラシックの声楽曲の基本として、イタリアの楽曲が用いられることが多いため、本学でも西洋の声楽曲の基本にイタリア語をテキストとする楽曲を用いている。本授業でも到達目標(2)に原語歌唱の実践を挙げているが、未習外国語のディクシオンは、初心者にとって容易ではない。そこで、楽曲の個別指導を受ける前に、ディクシオンの個別指導を授業担当教員から受けることを義務づけた。個別指導は、事前にアポイントメントを取り、授業時間外に受講することとした。受講に際しては、単語の発音、意味等を学習し、音読を義務づけた。

本授業では、半期でロマン派の歌曲1曲、近代歌曲1曲の最低2曲を歌唱することを義務づけているため、半期で2曲はディクシオンの個別指導を受講することとなる。

Gr.1は、ディクシオンについて個別指導を受講する前、Gr.2は個別指導受講後の授業時間外学習時間を示したものである。（無記名アンケート結果）

楽曲決定から個別指導までの準備期間は、1～2週間であったが、事前学習の平均時間は第1曲目118分、第2曲目124分、指導後の学習時間の平均は、第1曲目71分から第2曲目84分と、いずれも僅かながら学習時間の伸びが見られた。基本学習時間が短い受講生

の変化はあまり認められず、事前学習に関しては、第1曲で2時間の学習を行った受講者が、第2曲目で学習時間を伸ばす傾向が見られた。事後学習は、第1曲目で1時間の事後学習を行っていた受講者層が、30分程度伸びる傾向が見られた。逆に2時間の学習者が30分程度、時間を短縮する傾向が見られた。



なお、第2曲目で、指導後のディクシオン学習時間が270分に増加した学生は、その理由をディクシオンの充実が歌唱の上達に有益であると認識したためと述べている。

2. プログラムノートの作成

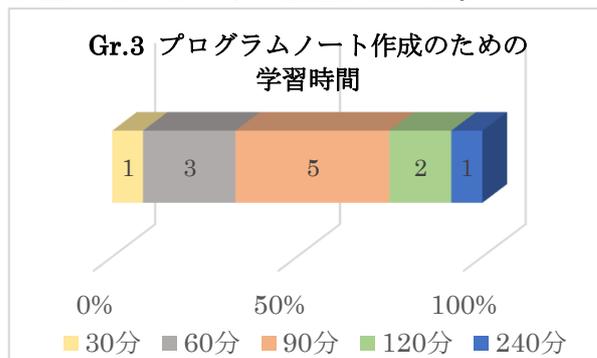
どのような歌唱を理想として学習するかを認識するために、到達目標(1)を掲げている。本授業では、中間発表と最終試験で歌唱する2曲に関して、プログラムノートの作成と提出を義務づけた。

Gr.3で最終試験のプログラムノートを作成するために費やした時間（受講票に記入された作成時間）を示した。

平均学習時間は95分であったが、作成にかかる時間が短い受講生は完成度が低く、歌唱表現についても、声楽①からの成長率が低い傾向が認められた。

プログラムノートの内容については、対訳との違いについての理解が充分でないこと、調べ学習で得た情報を選別し、自分の演奏意

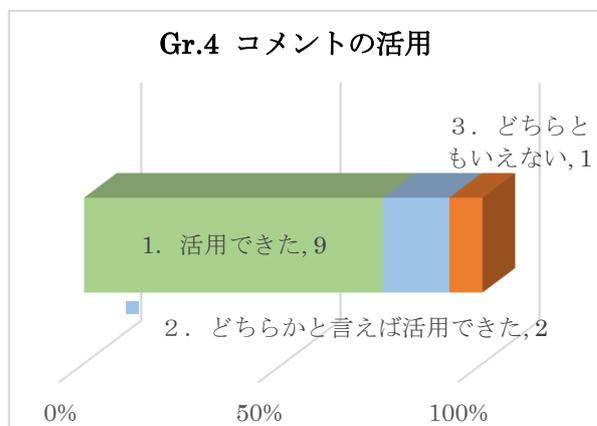
図を十分に表記したプログラムノートの作成に至っていない等の課題が残った。



3. 他の受講生からのコメントを活用した時間外学習

歌唱は、リアルタイムで自分の歌唱を客観的に聴くことが困難という特性を有している。受講票への歌唱に対するコメント記載を義務付け、個別に歌唱者へフィードバックした。時間外学習での活用を目的としたものである。

Gr.4により、他の受講生のコメントの活用について、5段階評価で問うた結果を示した。



積極的に活用した状況が伺える。活用の理由として、「前回と比べてどう変わったかがわかり、自分で改善点を見つけやすかった」「発音に関する内容や歌唱時の姿勢について、客観的に知ることができた」「自分では気づけない点や癖を指摘してくれるため、練習のポイントがわかった。」等の意見が挙げられた。

III. まとめ

時間外学習なくして授業が成立しない実技系の授業において、より効率的な時間外学習を目指し、授業改善を実施した。ディクシオンの時間外指導やコメントの集約等、授業者の負担は増加したが、その成果が認められた。

受講者から個別指導の時間の平等性を指摘された。楽曲の演奏時間の差に因るところもあるが、指導者の改善点として留意したい。